

駿建

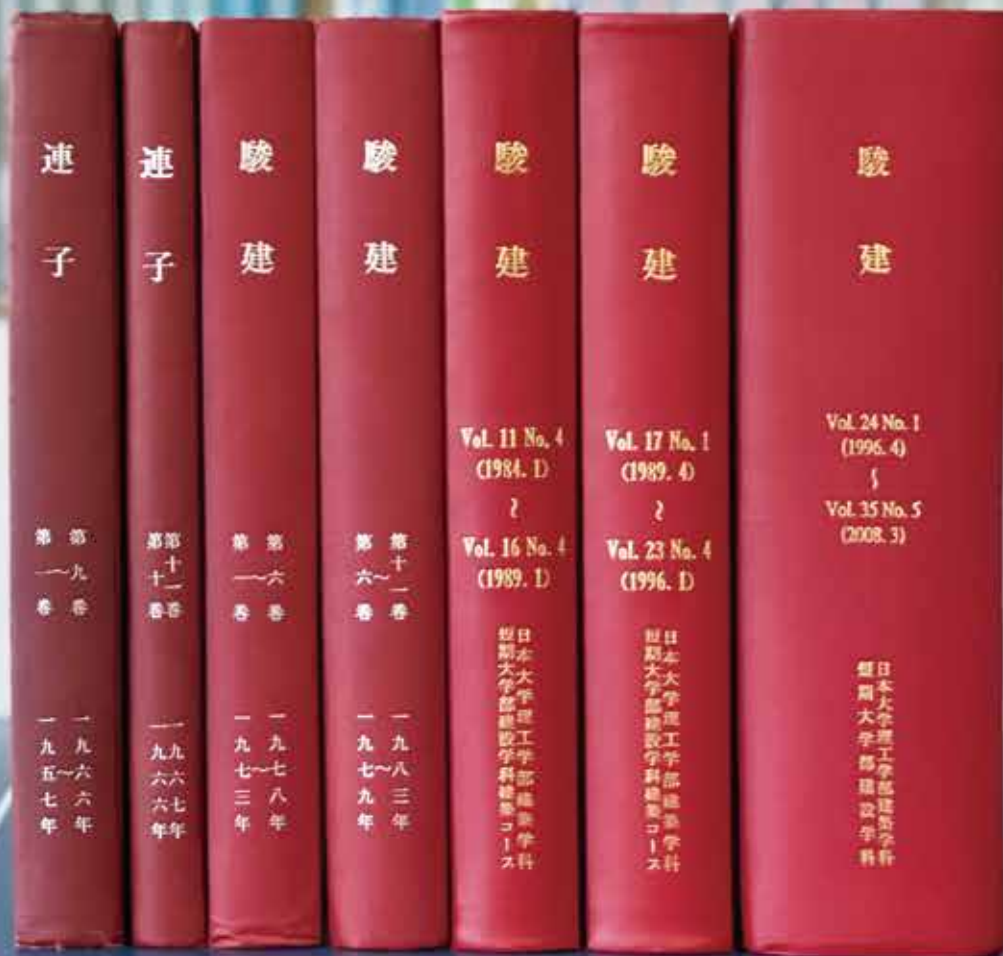
2022 Jan. vol.49 No.2

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

Quarterly Journal of

Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College



SPECIAL FEATURE

さよなら「駿建」

次の時代の学内メディアへ

SPECIAL FEATURE

さよなら 「駿建」

次の時代の学内メディアへ

この学内誌「駿建」が誕生したのは、約50年前、1973年のことでした。創刊号は、先生たちの研究の一端や人柄を知り、研究室を訪ねてみてほしい、そして講義以外のところで学びの場を広げてほしい、そして、建築を考える前に人間のあり方と思考を発展させてほしいと、当時建築学科主任だった加藤渉先生からの、創刊に対する想いのある言葉ではじまっています。

このようなメディアを持つべき意義は、今もこれからも変わらないことでしょう。しかし、紙メディアとしての学内誌「駿建」は、今号をもって幕を閉じることとなりました。創刊以来、その時代にに応じたコンテンツが企画され、編集され、発信されてきました。2012年からは、全ページカラーとなり、先生だけではなく、学生の皆さんにも登場していただくなど、新しい切り口も取り入れ、発行し続けてきました。

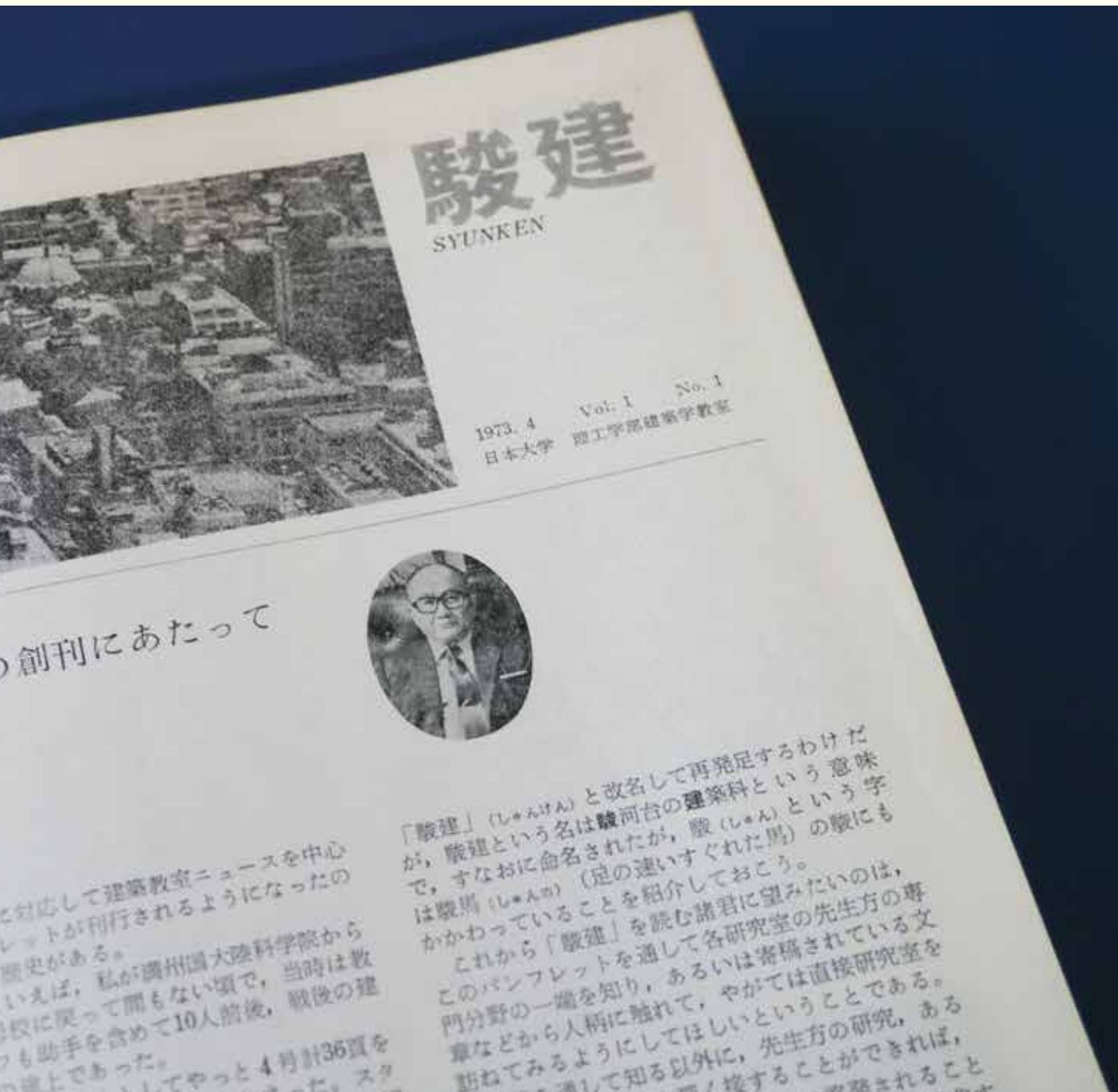
その一方で、私たちを取り巻くメディアの環境は大きく変化の一途をたどっています。大学という学びの場を、より豊かにするために、大学はメディアをどのように作り、どのように発信していくべきか。次の時代へ向けて前進していくことをお約束して、最後の特集では、これまでの「駿建」と、これからのメディアのあり方について話していきます。



「駿建」創刊号に寄せた加藤渉先生の寄稿文。タイトルは「『駿建』の創刊にあたって」。1973年4月号。



2012年からは、フルカラーのA4判としてリニューアルされた。それまでとは異なり、学内外のさまざまな物事の特集記事として企画していくことになった。



さよなら「駿建」 - スペシャル座談会 -

次の時代の 「駿建」のカタチ

学部から大学院まで、
毎年何百という多様で多彩な学生たちと先生たちが、
日大理工建築の中を蠢いてきた。

建築を学ぶ楽しさを伝えたい一心で生まれたであろう
学内誌「駿建」という紙媒体は、誕生から50年が経った。

先生たちも学生たちも、世代交代を繰り返してきた今も、
先生たちの想いは昔と変わらない。

次の時代の「駿建」へ向けて9名の先生方が集まりました。
「駿建」ってなんだったのか？
次の「駿建」はどうあるべきか？
振り返りながら、未来について話し合いました。

座談会参加メンバー



佐藤慎也
(さとう・しんや)
教授



古澤大輔
(ふるさわ・だいすけ)
准教授



山崎誠子
(やまぐち・まさこ)
短大准教授



井口雅登
(いぐち・まさと)
助教



泉山 聖威
(いずみやま・るい)
助教



井本佐保里
(いもと・さおり)
助教



宮田敦典
(みやた・あつのり)
助教



道明裕毅
(どうみょう・ゆうき)
助手



堀切梨奈子
(ほりきり・りなこ)
助手

司会 = 大西正紀 (mosaki)

「駿建」とその前身にあたる「連子」はすべてアーカイブされている。
まとめるとこんな厚さになる。50年という歴史の重み。

古澤：まず、紙媒体としての「駿建」の意義について話すところから、スタートしたいと思います。編集委員で一番若い道明先生はいかがでしょうか。

道明：今回の特集にあたって、「駿建」の前に「連子」(1957年7月～1968年2月)という学内誌メディアがあったということをはじめて知りました。最初に「連子」があって、そのあとの「駿建」が50年も続いている。その歴史の重みを知って衝撃でした。あとは、当時から先生方が主導して記事を書かれていて、そのことにも驚きました。今、読んでも、すごく面白い記事がたくさんありました。

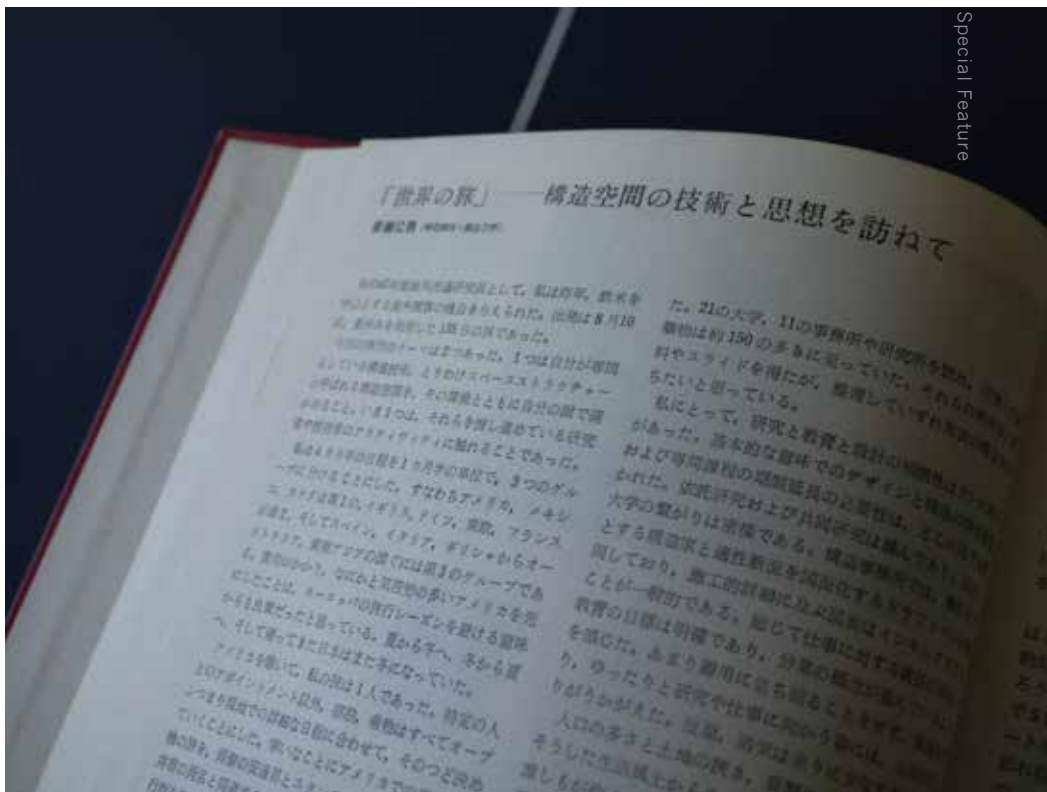
古澤：先生方が主導して記事を書いているというのは、どういうことでしょうか。

道明：例えば、私が開いた昔の「駿建」には、「私のお会った作品・人・本」というタイトルのコーナーがありました。そこで、安達俊夫先生や高宮眞介先生が、その年の卒業生、修生に対して2、3ページのメッセージを書いています。当時は、先生と学生がつながるためのメディアとしての役割が、今よりも強かったのだと感じました。

それこそ、携帯電話もなかった時代って、事務連絡すらままならないときもあったと想像します。そういうときに、どういう先生が着任したかという情報や、先生から学生の皆さんへの一言が載っているようなもので、学生さんの受け取り方は、今とはまるで違っていたはずです。この10年ほどは、判型も大きくカラーになって、学生がカラーで取り上げられて、時代に寄り添った形になっていました。それぞれの時代に面白さがあったんだなって改めて気づかされました。

古澤：確かに、今の時代と比べると、教員が学生たちを捕まえて話をすることすら融通が利く状況ではなかったのでしょうか。携帯電話もLINEもない時代ですからね。

堀切：私が手に取ったすごく古い「駿建」は、



「駿建」はさまざまな先生方の寄稿文によって支えられてきた。そこには授業にはないリアルなメッセージがあった。

学生と先生をつなぐために必要だった「駿建」

すごく汚い製図室の写真が載っていて、そこに「製図室を綺麗に使いましょう」みたいなことが書いてありました。そういう役割まで持っていたということですから、歴史を感じますね。

井口：今、「連子」を見ているのですが、名だたる先生たちが実際に書いている文章は面白いですね。はじめて見る写真とかもあって。発見ですね。

古澤：井口先生は、学生時代に配布される「駿建」を読んでいたか。

井口：学生時代は、実はあまり読んでいませんでしたが、改めてこうしてアーカイブを見ると、見覚えのある表紙があります。当時、自分が掲載されることはありませんでしたが、自分と同学年の人たちが掲載されることがありましたので、ああ、あの人がこんな賞を取ったんだとか、そういった発見はありましたね。

——ビジュアルとして目に飛び込んでくるのが多かったのも、設計デザインに興味のある学生にとっては、作品集とは別に先輩方の作品

に触られる貴重な機会だったと思います。その他の寄稿なども、興味があるものだけ、その都度、目を通していました。

佐藤：その視点が、多分大事だと思うんですよ。今ここは、実は教員の集まりで、何となく、古いものを読みながら、教員側の気持ちとして語っているのですが、一方で、自分が学生の頃を振り返ると、当時、誰も教員の言葉なんかきちんと受け止めていなかったって言う。教員になっている人ですら、そうだったという事実は、厳粛に受け止めないといけないかもしれません。

山崎：私は、武蔵工業大学(現東京都市大学)の出身なのですが、こういうメディアはありませんでした。母校のような研究室が10くらいの大学であれば、日々、各研究室がどんなことをやっていて、どんな人がいるかは4年も大学にいとわかるものですが、日大理工建築のように20も研究室があって、学生数が多いと、やはり「駿建」のようなツールが昔は必要だったのだと思いました。

かつての学内誌は、今のSNS的な機能を担っていた

古澤：おっしゃる通りでしょうね。巨大な組織だからこそ、情報を束ねて確実に届けようとしていた運営側の想いが伝わってきます。僕の母校（東京都立大学）にもありませんし、こういったメディアを発刊し続けていることは珍しいと思います。

井口：だからこそ、学生の当時、きちんと読んでいなかった自分が浅はかだったと、今になって反省する気持ちになります。こんなにいろんなことが書かれていて、当時読んでおけば、良い影響もたくさん受けたのだと思います。

古澤：でも、今の時代になって触れて感じることは、当時とは異なるかもしれません。そういう意味では、**このようなアーカイブをきちんと残し、公開し続けてきたことで、記事の価値は深まっていく**ということも言えると思います。それはこの先のあり方についても、ひとつのヒントになりそうです。

佐藤：今、僕は、自分が学生時代のときのものを見ていました。やはり全部ではないです

が、見覚えのあるビジュアルや内容が多いです。今でも連載されている「私と建築」といったコラムを非常勤の先生たちが書いていて、作品写真を見ながら、ああこの先生はこんな建築をつくってる人なんだとか、今の「スタジオワークス」的な機能もあったり、賞を取ったコンペが掲載されていたりして、よく見ていましたね。

古澤：いつの時代も学生たちは、自分の名前が載ると嬉しかったでしょうね。僕が印象的だったのは、ある号で、当時の本杉研究室の学生たちが自発的に実施コンペに応募して、連日徹夜で案を完成させて、一次審査を通りました、というとてもエネルギー溢れるレポートがあったのです。で、最後に本杉省三先生が、「君たちの顔は輝いていた」と書いていたんですね。純粋にすごくいいなって思いました。一方で、今の学生と教員との関係とは少し違うところもあったのかなとも思います。

佐藤：今だったら、学生の皆さんもいざとなれば自分で発信することができる。けど、昔はこういうメディアしかなかったわけです。だから、

その時代にあったメディアのあり方が**いつもある**ということなのかもしれません。

古澤：確かにそうですね。当時の彼らにとつての学内誌は、今の学生にとってのSNS的な機能を持っていたわけですね。誌面をひとついただけるのは、Twitterでそのことについて発信するようなことだったのかもかもしれません。

佐藤：今、手に取っている号では、非常勤講師の野島秀仁先生が、大学院生のときに渡辺富雄先生と海外へ行ったレポートを書かれていたり、こっちは「GA JAPAN」編集の杉田義一さんが韓国建築研修旅行記を書いています。こういった内容は、今であればSNSで発信されていた可能性が高いということですね。

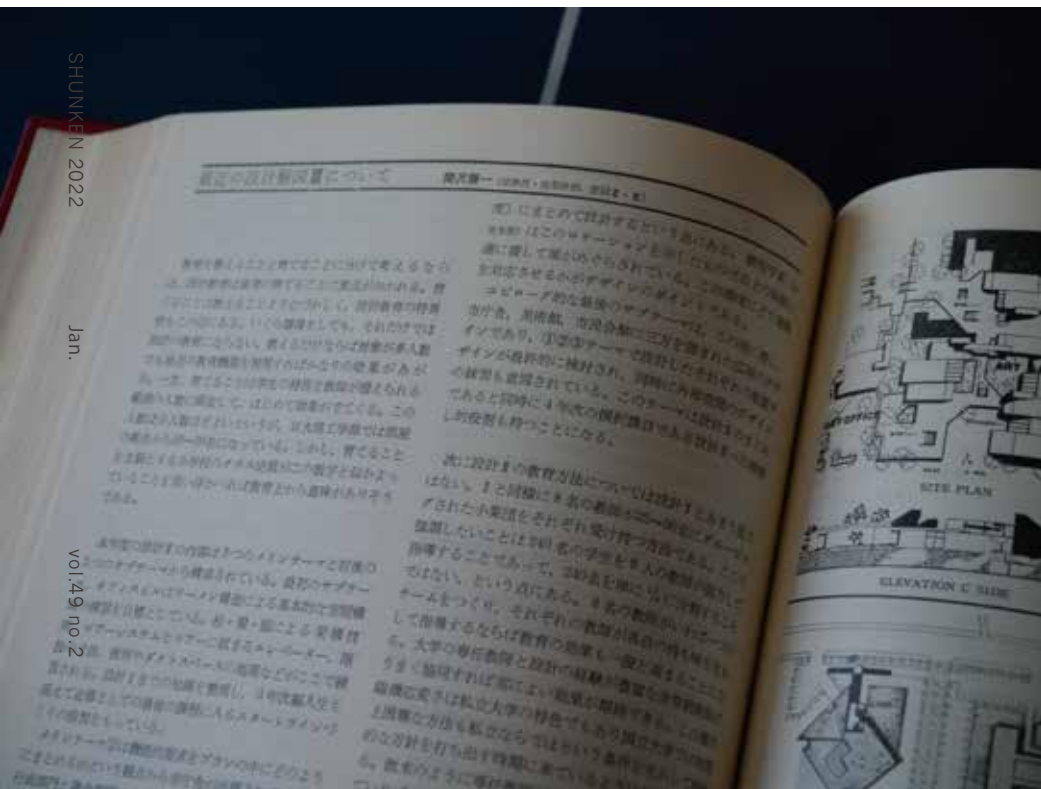
泉山：研修旅行のレポートもよく目にしました。新しい今のデザインになってからの「駿建」では、海外の都市が紹介されていたり、海外の良さを通して、外に視点を向けようとしている記事が多かったことが印象的でした。

佐藤：昔は、研修旅行だけでなく、研究のために海外へ派遣された教員は、その報告を「駿建」に書くというのがルールでした。外で見てきたもの、経験してきたことを共有するという目的がありました。

でも、やはり改めて感じるのは、**先生と学生との関係やメディアのあり方は、その時代ごと**に変わっていくということですね。

古澤：確かに。だから変わって然るべきなんだと思います。僕の学生時代のことを思い出すと、学生のときに、「**建築文化**」という雑誌で執筆させていただいたことがありました。誌面に何かを書いて発表して、いろんな人の目に触れる。そのとき、すごく興奮したんです。

佐藤：さらに遡ると、僕が大学1年生の頃に、当時、普及しはじめたワープロを買いました。自分が書いた文字が活字になって印刷されて出てくるって、すごく良かったですよ。**そんな時代と今では、自分のつくったもの、発言が印**



「最近の設計製図IIIについて」。設計製図の各授業に対する先生たちの評価・メッセージが伝えられた。（「駿建」1976年11月号）

刷物になるってこの意味が全然違いますよね。ちなみに山崎先生は、大学生のとき、レポートは手書きでしたか。

山崎: 全部手書きよ! 論文も手書きだし、研究会でつくった巨大プレゼンシートも全部手書き。字体は、当時「美術手帖」で使われていたゴシックを全部コピーして。それを1枚ずつ貼りつけて文章をつくっていくという時代でした(笑)。

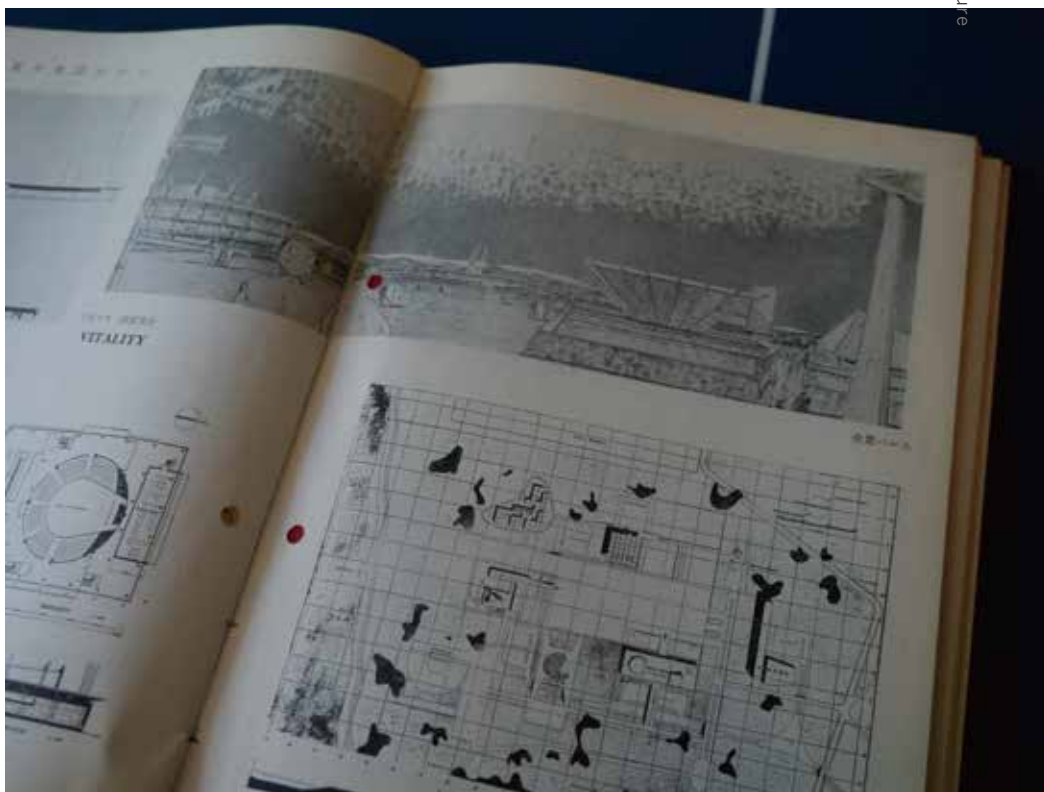
佐藤: 時代によるメディアの変化という背景はいつもあります。2012年にA4判カラーの「駿建」になったのも、カラー印刷の冊子が、手軽な価格で印刷できるようになったからだったんです。少し前の印刷を巡る状況では、とても予算内ではカラーの冊子をつくることはできませんでした。リニューアルしたときは、もちろん当時としてはかなり最適なメディアという感じでした。

山崎: 印刷が安くできるようになったことは大きかったですね。優秀作品集である「スタジオワークス」も、よりつくりやすくなりました。

古澤: A4判カラーの「駿建」になった頃は、研究室で配布しても、見ている学生は多かったです。当時、持ち運びしやすいフリーペーパーのような形式が合っていたと思うんです。でも、それが今は合わなくなってきたのではないかと。ということで、「駿建」をウェブ化することを、この編集委員会でも話しはじめています。A4判カラーになってから9年で、賞味期限が来てしまったように感じる背景は何なのでしょう。

佐藤: 現実的には、4、5年で賞味期限が切れていたのかもしれない。

古澤: コロナ禍で物理的に配布ができなくなってしまったことはありましたが、やはりその少し前から、読んでくれないなという雰囲気は確実にありました。すると、2017年くらいからでしょうか。



卒業設計の優秀作品も、昔は「駿建」で詳細が掲載されていた。写真は高宮眞介元教授の卒業設計(「連子」1962年2月号)。

メディアも変化し「駿建」も次の在り方へ

佐藤: おそらく、Instagramが普及した頃にも重なると思います。文章を長く読むよりも、印象的な1枚のビジュアルに対して強く反応するようになっていった気がします。

古澤: Instagramは2016年くらいにユーザーが5億人を超えていたようです。そういった複合的なメディアの発達によって、「駿建」のような紙メディアの優位性にも影響していたことは言えそうです。

井口: 「最近の学生は文字を読まない」なんてことは、昔から言われていることですが、今ではYouTubeの動画でも飽きられてきて、2倍速で動画を見るなんていうくらいなので、紙メディアが本当に難しい時代に入っているのでしょう。

古澤: スマホの画面の発達とも関係してそうです。画面が大きくなってきたことで、情報量も確実に変わってきました。2016年、17年くら

いから、大画面化が起きていきました。

佐藤: 確かに。昔の小型のスマートフォンだったときは、文字をたくさん打とうとは思いませんでした。でも、今では画面が大きくなって、2、3年前くらいからは、スマホだけで卒業論文を書く人が現れて驚きました。きっと彼ら・彼女らにとっては、キーボードを打つより早いんでしょうね(笑)。

古澤: 今回こうしてお話しさせていただいて、メディアの変化や学生と教員の関係の変化を反映させて、「駿建」は次のあり方に移行していかなければいけないということが、よりわかってきました。

でもこれは、学生と教員との関係、学生と大学との関係が希薄になっていくということではなく、逆にその関係を強く持てるようなあり方を見出したいということです。そのためには、まず対外的な大学のメディアの軸でもある、

教員が本気で伝えられるメディアはあってほしい

日大理工建築の学科ホームページを見直すことも必要かと思えます。

泉山先生は、たとえば建築学科の学生だけに、自分の考えていることを伝えたいとしたら、どういった手段が一番有効だと思いますか。

泉山：まず、今の学生たちにとって、一番身近な情報の入り口はSNSだと思います。その先での詳しい情報を読みたいという場合は、リンクを介して学科のホームページや、「駿建」のようなページに飛ぶことができれば良い。もちろん、そこまでたどり着く人が全体の何割いるかという話はあると思います。多くの人は、概要の情報だけで満足する。詳細を知りたい人は、2、3割くらいではないでしょうか。

佐藤：「連子」や「駿建」を見ていると、教員側から学生にこういうことを教えてあげたい、伝えたい、みたいなことと、学生が必要であろうと思っていることをどう提供するか、という2つがあると思いました。

泉山：日々、学生たちと接していて思うのは、

先生として届けたいことはたくさんあって、伝えようとするのですが、全然響かないことが多いのです（笑）。大半は反応が薄い。それでもその中の2割くらいの学生たちは、きちんと聞いてくれています。だからこそ、情報を欲している人たちには、きちんと情報が届くことが大事だと思います。

佐藤：井本先生は、今回、どのようなことを感じられましたか。

井本：今回、「連子」や「駿建」のアーカイブを拝見して印象的だったのが、**教員が学生に対して本気で伝えようとしている姿勢**でした。

これまでの議論にあったように、今や、SNSを通して学生だけではなく、教員も自分で発信しています。また、教員が自分が何をやっているかは、雑誌などの専門メディアでも発信しています。学生には、それを見てくださいと言えば済んでしまうのかもしれませんが。

でも、以前はSNSもありませんでした。だからなのか、昔の「連子」や「駿建」に寄稿

されている先生方のテキストからは、とても「本気」が伝わってきます。例えば、前川國男事務所に就職されたOBの方が、東京海上ビルの景観論争に対して反論している記事がありました。今は建て替え計画が進む中、保存のための活動も行われていますが、当時は逆に建てるのが批判の対象になっていたということがわかります。とても長い文章だったのですが、そうした本気の議論をする場所だったのだな、と驚きました。

もちろん、その時代に合わせて、読みやすいものへと変わっていったことはわかりますが、逆にサラッと読めるような記事にシフトしたことで、学生たちも本気で読まなくなってしまうのでは、と思ったりします。だからこそ、今後どのような形になるにしても、**ここでしか発信できない本気の情報を伝えることが大事**ではないかと思いました。

佐藤：なるほど。先生方も、本気で言うことは、一般の雑誌やウェブメディアに書くようになっていって、学生たちに対して、本気なことを書く感覚がなくなってしまったということかもしれません。それが昔はあった。

井本：近年はコンプライアンスが厳しくなっていることもあって、無意識に当たり障りのないところで止めてしまっていることもあるような気がします。

佐藤：井本先生は、研究室のホームページをきちんと運用されていますよね。

井本：対外的な広報目的で、これから研究室を選ぶ学生や、学外の同じ分野で活動をしている人たちに見てもらえるようなものにしたかったのです。

佐藤：そのときのメディアとしては、ホームページが最善だと考えたのですか。

井本：個人的に、SNSの持つ発信力よりも、アーカイブ性の高いホームページが好きというところ。ホームページはゆっくりした自分の



3年生の設計課題「建築家の別荘」に対する宮川英二教授による評価。高宮真介元教授の名前も。（「連子」1961年2月号）

ペースで更新できることが良い点です。

佐藤：構造系代表として、宮田先生はどうか。学生へ伝えたいことがあるのか、あったときにどういう手段が良いのか。研究室として、ホームページやSNSをどう考えているか。宮田先生は、この数年、「駿建」に文章を書いていただくことが多かったと思います。自分の体験や研究を絡めて文章を書くのが、いつも上手いなあと感じていました。

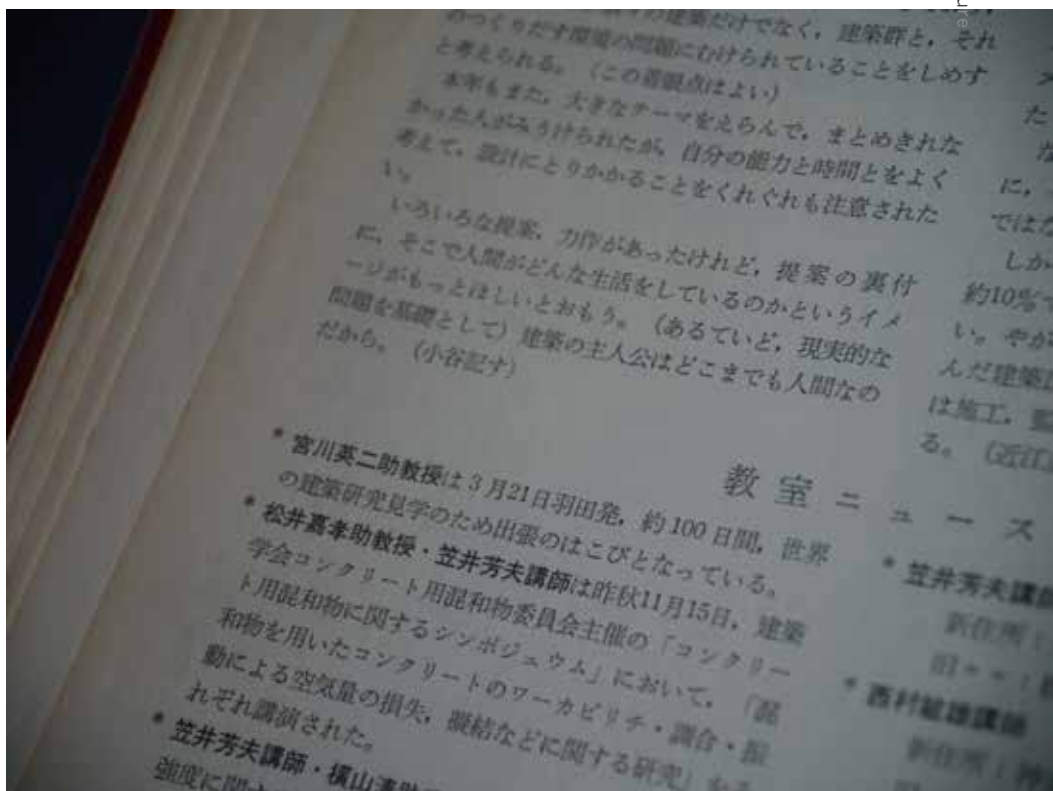
宮田：「駿建」のバックナンバーを改めて読んでみて、今になってみるとすごく面白い。皆さんも話していたように、アーカイブとして見たときに、当時こんなだったんだな、とか。あとは、自分の研究室の前の前の先生の記事とか見ると、やっぱり面白いんです。だから、たとえ一部の学生しか見ないかもしれないとしても、卒業生たちが何年後かにアーカイブを読んで、そこに求めるものを見つけることもあると思うんです。だから、そういうアーカイブ性は、たとえ紙からウェブに形態が変わったとしても、大切にしてほしいなと思いました。

佐藤：逆に、私たちが過去のアーカイブにアクセスできているのは、今、紙の冊子たちがここにあるからですからね。何万人もの卒業生たちは、データ化されていない「連子」にはアクセスすらできていません。未来の読者に向けて考えても、なおのこと紙メディアではなく、ウェブなのかもしれません。

古澤：そうですね。今からでも、「連子」はスキャンしてアップすることはできますね。

佐藤：そうあるべきかもしれませんが、でも、教員の住所とか全部載っちゃったり、あまりにもプライベートなことも書かれすぎていたりします（笑）。

井口：もちろん、「駿建」という存在を残してほしいという声も、きっとたくさんあると思います。だから、積み重ねていくというアーカイブ性を保ちながら、私たちの手で、ベストな解答を見つけていかなくてはいけないと改め



ニュース欄には、先生たちの出張や学会への参加など、さまざまなニュースが掲載されてきた。（「連子」1962年2月号）

形は変えてもアーカイブ性は大切にしたい

て思いました。

佐藤：今日は教員同士が話をしているので、やはり研究者目線が強いですね。だから、過去のデータに対するリスペクトが強い気がします。そこを差し引いて考えたときに、たとえば、今の学生たちに対して、ウェブ版として「駿建」を残すようなことが良いでしょうか。

井口：受け手の学生も、送り手の教員側も変わっていきます。実は、今日ここへ来るまでは、私は単純にSNSにしちゃえばいいなと思っていました。でも、今日の議論の中で、たとえば**特集を組むという、我々には必要はないのだけど、何か魅力づけをするためには必要な発信をしていこうという心意気はあったほうが**いいなと、少し考え方が変わってきました。答は簡単に出せないのですが、学生にとって何がいいのかを、細かく考えていかなければいけません。ひとつのメディアを閉じることは簡単だからこそ、残し方、次への展開の仕方を丁寧に考えてい

かなくては思いました。

古澤：そういう意味でも、今回、紙メディアを続けていくのか、どうするのかという議論は、いい機会になったと思います。改めて建築学科の広報メディアの整理をしていったときに、まず一番大切なものは学科のホームページだという、とても当たり前のことにも気づきつけになりました。やはりメディアは生き物みたいなもので、時代の変遷とともに変化しなければいけないものです。そういう意味で、私たちが今回、紙メディアの「駿建」を考え直そうと決断したのは当然のことだと思います。

先ほど井本先生がおっしゃっていた、昔は先生方の社会にも向けた本気度の高い文章があったという指摘は腑に落ちました。近年はそのような記事はなかったですね。僕が見た中でも、学生たちの自立的な文体にはエネルギーを感じました。もちろん今は、クレームも回避しなければいけない時代なので、ストレ



特集は魅力を伝える手法として残そう

トな記事も書きづらい状況にはあるのかもしれませんが、どこかで教育がサービス産業になりすぎているところも背景にありそうです。コンテンツが当たり障りない感じで求められる一方で、先生方には、もっと熱いメッセージを学生に投げかけたい気持ちも、実はあると思います。

佐藤：本気度についての話は、2種類あるように思いました。ひとつは井本先生がおっしゃっていた**自分の専門分野に対する本気なこと**。それは、1,000人程度の学生が読む「駿建」よりも、きちんと原稿料がもらえる専門誌から発信したほうが、よりそれを読むにふさわしい読者にも届きます。その上で、そういった**本気の文章を先生たちが書いたということ**を、**きちんと学科の中で伝える術を持たなくてはけません**。もし、その文章がウェブサイトであれば、そこにリンクを貼る。論文のような形式になっていない場合でも、すべてそのようなものは、学科として発信していく必要があると思います。

そして、もうひとつは、先生方の専門分野の話ではなくて、**建築学科のコンテンツとして残さざるを得ないのは、教育に対する本気のメッセージ**だと思います。建築の教育、設計の教育について、学科として先生たちはこういうことを考えています、ということは、「駿建」が形を変えたとしても、伝え続けていかなくては

いけないことだと思います。さらにそれは、**広報として考えると、内部の学生たちだけでなく、外部の人にも発信するべきもの**だとも思います。

泉山：メディアを通して先生たちの生の声や姿に触れられると、やはり伝わり方が違ってきます。私は、2012年の巻頭インタビューで登場された横河健先生がとても印象的でした。私が学生のとき、横河先生は設計を教えられていたのですが、エスキスで模型を壊されたといった逸話があったり、とにかく怖いイメージしかありませんでした（笑）。ところが、その誌面に登場した横河先生は、まったく印象とは異なるものでした。「駿建」の誌面上の先生は笑顔で、設計を通してどんなことを考えられてきたかを魅力的に伝えられていました。

自分で書く、発信することにも限界があるものです。だからこそこうして、取材を受けて、質問に答える形で浮き彫りにされ、それが読みやすい形に編集され、発信されていく機会は貴重だと思いました。先日、学生たちから、どうして都市計画の分野に入られたのですかと聞かれたのですが、そういうことを改めて話す機会もなかなかないということに気づかされました。**これからも、インタビューなど、取材や編集を通じて発信していく部分は、必ず残し**

たほうが良い

佐藤：本来、建築学科のホームページには、教員それぞれの魅力を伝えるようなインタビューが全員分あるべきかもしれません。そういうコンテンツを、毎年少しずつ増やしていくのも良いでしょう。

井口：確かに、こういった取材と編集によってつくられる内容は必要であり、SNSでは伝えることはできないものです。自分で発信するのに、自分の笑顔の写真をSNSにわざわざ載せませんから。確かに、先生たちが、どうしてそのような研究を行っているかを話す機会は、実はほとんどありませんね。

— 私は、「駿建」がA4判のカラーになるところから、取材・編集・デザインをさせていただいてきました。それまでは、学生のときも、OBになってからも、設計計画系の先生方とお話させていただくことがほとんどだったのですが、新しい「駿建」づくりを通して、他の系の先生や学生の皆さんにインタビューすることが増えていきました。

インタビューする度に、他の系に対して、また、日大理工建築の全体に対して、全くイメージが変わりました。どの先生も、非常に人間的

2012年にA4判のオールカラーにリニューアルされてからは、毎号特集が組まれるようになった。左は、泉山先生の発言で触れられた横河健先生へのインタビュー記事（2012年7月号）。普段ゆっくり聞くことができない、設計への想いをうかがった。また、右のように学生たちの活躍も積極的にビジュアルを伴って発信していくこと、また海外に視点が向くような情報も積極的に取り入れられていった。



で、それぞれにヒストリーや人生があって、いろんな出会いや発見の中で、自分の分野に没頭していらっしゃる。あるいは、新しい研究やデザインへとつながっていく。それが、研究室の数、先生の数、学生の数あるのだと気づいたときは、すごい大学だなと思ったものです。

そのことについては、これから「駿建」の形がどう変わっていくとも、伝えていかなくてはいけないことだと思いますし、そこにこそ、学生の皆さんが何かしら引っかかる部分が生まれると思うのです。

佐藤：最新の「スタジオワークス」では、動画コンテンツをはじめました。先生方へのインタビューが動画という形でも良いですね。

— 動画は、アーカイブ性が保たれやすいメディアだと思います。例えば、昔の「駿建」に「フジタ・都市講座」という講座の記事があって、レム・コールハースやダニエル・リベスキンドなど、名だたる世界的建築家たちが、日大理工建築に集結していたそうです。

もし、あの当時にYouTubeがあって、今そのアーカイブがすべて見られたとしたら、そのコンテンツの集積の価値は、学内的にも対外的にも大きなものになっていたはずですよ。



Contents

[SPECIAL FEATURE]

- 2011年度 日本建築学会賞受賞記念インタビュー
「多面体の屋根・結集むろの」と作品集「KEN YOKOGAWA Landscape and Houses」横河健教授の今、考えること。

[NEWS & TOPICS]

- 2012年度 建築学会賞受賞記念インタビュー
「多面体の屋根・結集むろの」と作品集「KEN YOKOGAWA Landscape and Houses」横河健教授の今、考えること。
- 建築学会賞受賞記念インタビュー
「多面体の屋根・結集むろの」と作品集「KEN YOKOGAWA Landscape and Houses」横河健教授の今、考えること。
- 建築学会賞受賞記念インタビュー
「多面体の屋根・結集むろの」と作品集「KEN YOKOGAWA Landscape and Houses」横河健教授の今、考えること。
- 建築学会賞受賞記念インタビュー
「多面体の屋根・結集むろの」と作品集「KEN YOKOGAWA Landscape and Houses」横河健教授の今、考えること。

[REPORT]

- 建築学会賞受賞記念インタビュー
「多面体の屋根・結集むろの」と作品集「KEN YOKOGAWA Landscape and Houses」横河健教授の今、考えること。

[A PHOTO OF WORLD ARCHITECTURE]

- 「多面体の屋根・結集むろの」と作品集「KEN YOKOGAWA Landscape and Houses」横河健教授の今、考えること。

[EVENT REVIEW]

- 「多面体の屋根・結集むろの」と作品集「KEN YOKOGAWA Landscape and Houses」横河健教授の今、考えること。

SHUNKEN
2012 July Vol.49 no.2

これは、これからの未来に置き換えて考えても、日大理工建築にとって大きなポテンシャルだと思います。元々が魅力的なかなりの数のコンテンツを内包しているので、今後どのようなメディアに展開したとしても、どの大学よりも可能性が大きいと考えています。

古澤：なるほど。YouTube動画のインタビュー集なども良いかもしれません。「フジタ・都市講座」など、過去のことについても振り返り、解説するなんてこともあるかもしれませんね。そのメディアにあった、コンテンツを考えていくことができそうです。

今日は、ここで次の展開についての答を示すことができませんでしたが、「駿建」という

紙メディアは、一旦ここでお休みとさせていただいて、学生の皆さんと教員たちが、日大理工建築という学びの場をより魅力的にしていくために、メディアを再構築することをきちんと模索していこうと思います。ポジティブな意味で、学内誌「駿建」というメディアが、時代とともに変わっていきます。再び何らかの形で皆さんの前に登場するということをお約束して、この座談会を終わりとさせていただきたいと思っています。今日、お集まりいただいた皆さん、貴重な機会をありがとうございました。 関

さよなら「駿建」 - 寄稿文 -

私と「駿建」

01

「連子」から「駿建」へ - ふたつの思い出

TEXT=斎藤公男（さいとう・まさお）名誉教授

「駿建」の編集委員から原稿執筆の依頼があった。もしかすると、ウェブメディアとしての再出発をめざす中で、「駿建」そのものがなくなるかもしれない。その紙媒体の最終号に対して、「連子」から「駿建」のすべてを見てきた私に何か思い出を、と。ふり返れば「建築の葉」（1950～）、「連子」（1957～）、「駿建」（1973～）と続いた歴史は約70年。学生と教員、建築と社会を結ぶ絆としての役割を果たした「冊子」は、他大学からも好評を博してきた。時代をのりこえてきた建築教室のバトンのようにも思える。

私には忘れられない思い出がふたつある。ひとつは「連子」への、学生時代の投稿である。私が日本大学理工学部建築学科に入学したのは1957年。いまは文理学部のある世田谷・下高井戸の校舎の近くには牧場が広がり、1年次は土木工学科と一緒にクラス編成であった。この年、ふたつの出来事が建築界を揺るがせる。「ブラジリアの新都市計画」と「シドニー・オペラハウス」の国際コンペ・最優秀案は、世界に衝撃を与えたのだ。そして、建築雑誌にも海外からの新しいデザインが溢れ、「構造芸術」とも呼ぶべき構造技術の波が押しよせてい

シドニー・オペラハウス（1972年/作：筆者）。

た。2年生で駿河台に移行すると、人気の「構造研究会」に入会。1号館の2階の部室はいつも満員であったが、先輩たちの手厚い指導が何より嬉しかった。「東京タワー」が完成した翌年の1959年、駿河台に聳え立つような「5号館」が完成する。ブルータリズムの、と評された新館のオープンスペースは眩しいほどに広く、小野襄先生のデッサン演習も大人気。屋上からは隅田川の花火大会が身近に望まれた。

思い起こせば、日本建築学生会議の活動を通じ、他大学の学生たちと交流したのは、3年生になって、当時2年先輩の谷保恭造氏に強く誘われたこともあるが、自身に「東大、早大など何するものぞ」の気概があったものと思われる。関沢勝一先生らと参加した国際コンペも懐かしい。折しも旗頭の黒川紀章氏が、国際会議出席のためロシアに行くという。その費用調達のために度々大手ゼネコンを訪問したが、それを意に介さず実行できたのも時代の空気なのであろう。そうした中で、日本で開催される「世界デザイン会議（WoDeCo）」への関心が高まっていく。槇・菊竹・大高らのメタボリズムグループが輝いていた。しかしその一方、

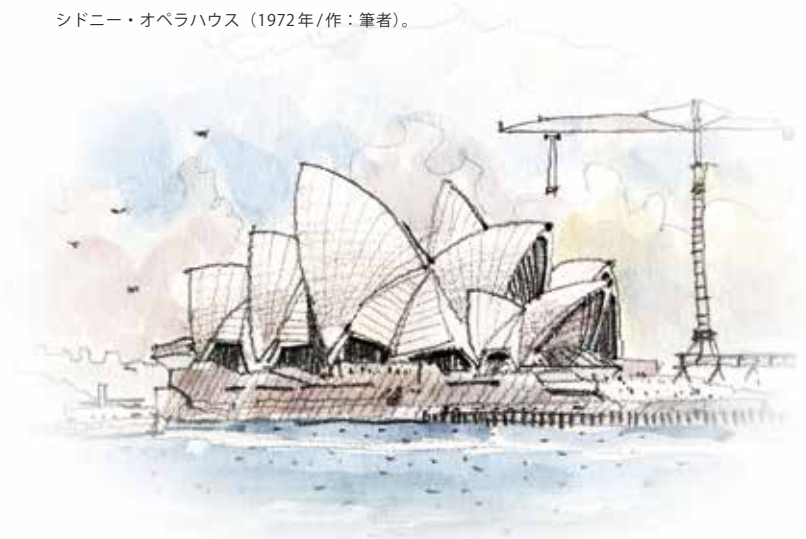
全国的な「60年安保」の激動の波は、日大キャンパスにも押しよせていた。

極めて厳しい時代の流れであった。ある日、小林文次、市川清志教授らに5号館の研究室に呼びつけられた。15名程の同級生（真面目だが熱い）に告げられたのは、「退学勧告」。学生たちの一途な行動を前にして、先生方も大変だったに違いない。その頃の、そうした気持ちの高揚が、「連子」（1960年6月号）への投稿を促したのであろうか。あるいは編集担当の近江栄先生に「煽られ”鼓舞されたのかも”しれない。「世界デザイン会議への期待」と題した拙文の結びには、自分達学生の自覚や、建築・建築家への道が見えない揺らぎの目線がある。そこには、卒研を構造系の坪井善勝研究室（東大生研）にやっと決めながらも、建築デザインへの憧れや不安ものぞいている。

「(前略)我々が当面する学校での課題、卒業設計、工学祭等の全ゆる機会は、一個そつのない作品を作る以上に、与えられたものでなく、既成概念に拘束されぬ新しい思索と提案の場を提供してくれる。(中略)自己の建築観、世界観を培いその内部エネルギーを発散させ対決していく態度こそ認識されねばなるまい。／建築は抽象的な個々の造形でなく、人間生活そのものの造出であり、だからこそ建築家は人間生活のイメージ、都市のイメージをもった芸術家であり、技術者であり、そして人間であらねばならぬのだ。／集まるべくして集まったWoDeCoのエネルギーが何を提起し来たるべきトータルイメージへののろしを上げるか。／今の混迷の危機は人間の叡智と力を結集して未来を予測する時を迫られ、モリス・グロピウスに次ぐ異次元の第2のサイクルは始ろうとしている。」

この「連子」の発行は1960年6月30日。その直前の6月15日、最終段階に追い込まれた安保デモに参加していた榊美智子氏（東大生）が、突入した国会議事堂内でその若い命を奪われ、日大の同級生の一人も片眼の光を失った。「自分」と「建築」の道をどう進むのかの模索、「青春」の悩み。それが「連子」につながる私の一番の思い出である。

ふたつ目の思い出は「駿建」創刊号である。前回の東京五輪を翌年にひかえ、「国立代々木



競技場」の建設も佳境の1963年、私はふたたび駿河台にもどり、当時理工学部次長であった齋藤謙次先生の研究室に入ることができた。やがて、1968年春頃から突入した学園紛争のため、「連子」は廃刊となる。そして1973年4月、5年ぶりに「駿建」として復活。その命名について建築学科主任・加藤渉先生の言葉が添えられた。「“駿”には駿河台に育ち、飛翔する駿馬のイメージがある」と。

4月の創刊号に、編集子から請われた一文を掲載していただいた。題して「世界の旅—空間構造の技術と思想を訪ねて」。その前年の夏休みに海外研究員として派遣された報告書を、ということであったが、4ページにわたる日記風で感傷的な文章となってしまった。それ程説明し難い「研修」の日々であった。1か月程度の出張予定は、いつのまにか135日の「長旅」となり、訪ねた国は17、都市の数は47。21の大学、11の事務所を訪れ、目的とした建

築物は約150の多きに至っていた。1ドル360円の約50年前、スマホはもとより電話もままならない、地図と時刻表だけが頼りの貧乏旅行。出発時78キロあった体重は、帰国時63キロになっていた。改めて振り返れば、駆け出しの新米講師（34歳）の勝手な行動に目をつむってくれた教室の先輩諸先生には、感謝あるのみである。

私にとって「駿建（創刊号）」は、それから“駿馬”になった。

見聞きした記憶と体験は、「構造とデザイン」の講義や「空間構造」の研究・設計に活かされた。約35年後の2008年、日本建築学会で企画し、日大パワーで実現された「アーキニアリング・デザイン（AND）展」の開催もここを起点としている。建築の世界、未知なるものへの期待と興味は尽きることはない。

次の時代をどう拓くのか。「駿建」の駆けゆく未来を見つめていきたい。

■



理工学部5号館（2019年/作：秋元和雄（5.36年卒））。

02

目が離せない「駿建」に！

TEXT= 蜂巣浩生（はちす・ひろお）教授

学生の皆さんは日頃「駿建」を手取ることはあるでしょうか？

私が学生の頃の「駿建」は、現在のようなカラフルなものではなく、B5判のモノクロ印刷の冊子でした。年4回発行の「駿建」には、その発行時期に相応しい情報が掲載されます。年度はじめの駿建には、それぞれの学年での心構えや履修上の注意などが記載されるので、駿建+学部要覧+時間割のセットを傍らに、仲間と履修計画を相談したものでした。

また、一学生にしか過ぎない私には、意味不明な専門用語がちりばめられた卒業研究・修士論文題目の一覧も刺激的でした。「さっぱり解らないなあ（当然ですが）、何て難しいことをやっているんだろう、凄いなあ」と思うばかりで、大学院への進学を考えていた当時の私にとって、まるで別世界の話のようにも感じていました。卒業生から寄せられる仕事のレポートは、実務の難しさや問題解決に取り組む

姿勢などに感心させられると同時に、学生にとっては就職状況の記事とともに卒業後の進路決定の参考になっていたと思います。オリエンテーション・海外研修旅行に参加した学生たちの声も、実際の建築物への関心を一層喚起するものでした。

このように当時の学生たちにとっては、大変身近な情報源としての役割を果たしていたと思います。その後、A4判の総カラーページに姿を変え、主要な情報は「別冊駿建」として一冊にまとめられました。確かにそうしたほうが合理的だったのだと思いますが、同時に学生たちの手から離れていったようにも感じます。研究室に卒研生用として配付されたものの残部が増えこそすれ、減ることはないのが残念です。

そして、「駿建」はこの度ウェブ化されることになりました。これも時代の流れなのでしょう。我々教員が活動しているさまざまな学会までも

が、諸般の事情からその刊行物のデジタル化に踏み切る現状にあつては、当然のことなのかもしれません。ただ、ウェブ上に掲載された情報というのは、意識して見ようとする姿勢がなければ見過ごしてしまいやすいことも事実です。ですから、学生が自ら見ようとする内容になり得るかが重要になってきます。

今後、大学が発するに相応しい情報の発信とともに、学生たちの建築への関心を大いに盛り上げ、学生と学科・教員、現役学生と卒業生とを結ぶ、有意義な情報媒体として、存続・発展していくことを願ってやみません。

■

さよなら「駿建」 - 寄稿文 -

私と「駿建」

03

バックナンバーを見直して

TEXT=宇於崎勝也（うおざき・かつや）教授

目前に「駿建」Vol.1 No.1（1973年4月号）からVol.40 No.1（2012年4月号）までの合本と、Vol.40 No.2からVol.49 No.1（2021年6月号）の各号が並んでいます。前者はB5判の白黒印刷で、後者はA4判カラー印刷です。49年にわたってほぼ季刊で発行し続けてきました。学科主体で情報発信の冊子を定期的に発行し続けているのは、理工学部の中でもまれで、現在は建築学科を除くと3学科（交通システム工学科「交通Bulletin」、海洋建築工学科「カイケンmagazine」、まちづくり工学科「まち」）しかありません。「駿建」とは、このような特別な冊子です。

Vol.1 No.1の表紙には加藤渉主任（当時）が、「『駿建』の創刊にあたって」を掲載していますが、その中に次のような言葉があります。「これから『駿建』を読む諸君に望みたいのは、こ

のパンフレットを通して各研究室の先生方の専門分野の一端を知り、あるいは寄稿されている文章などから人柄に触れて、やがては直接研究室を訪ねてみるようにしてほしいということである」。インターネットやホームページの普及以前、学生が先生方や研究室の情報を得るために、このような冊子が重要であったのです。

私は、1983年4月に建築学科に入学しましたから、最初に手に取ったのはVol.11 No.1（1983年4月号）だったと思います。その表紙には、多治見宏主任（当時）が「進学・入学おめでとう」のコメントとして、「友と、先輩と、師との語らいのなかに、自らの進路を見いだしてほしい」と述べています。さらに、この年の「駿建」をパラパラとめくってみると、恩師の小嶋勝衛先生が教授に昇格されたこと（Vol.11 No.1「教室プロムナード」（1983年4月号）、

理工学部創設100周年記念ロゴマーク製作者の野老朝雄氏の父上、野老正昭非常勤講師の作品紹介（Vol.11 No.2「私と作品 第10回」（1983年7月号）、小林文次先生への追悼文（Vol.11 No.3「偲 小林文次先生」（1983年11月号）などの記事が掲載されています。入学した頃は意味もよくわからずに読んでいたのだらうと思います。

今、「駿建」のバックナンバーを改めて見直すと、そのときどきの建築学科の様子がよくわかります。教員の動向、カリキュラムの変遷（企画経営コースの設置はVol.14 No.1で紹介）、修士研究・卒業研究の題目や卒業生の動向など、建築学科の足跡のほぼ半分を辿ることのできる貴重な資料です。私が1993年4月に助手として勤務をはじめたときには、新任紹介などの記事はなく、はじめて記事を任されたのはVol.23 No.2（1995年7月号）の表紙で、「住むかたち」と題して海外の集合住宅の写真を掲載しています。これは、日本大学長期海外派遣研究員として、1年間の出張から帰国してすぐの報告でした（詳細な報告はVol.23 No.3に掲載）。

Vol.43 No.2（2015年7月号）から4年間、編集委員も務めました。各号の特集の企画、原稿の依頼、校正など大変な作業量でした。今後はウェブ上での情報発信に移行することですが、編集委員の作業は、情報発信の相手が広がる分、より一層の情報の正確さやプライバシーの配慮などが求められることになり、大変なものとなっていくと考えられます。在学生を主な読者としてはじまった「駿建」が、その役割を建築学科の対外的な広報へと変化してきた結果の決断と思います。さらに読者を増やして、永く継続することを期待します。 駿



「駿建」合本とA4判カラーとなった近年の「駿建」たち。

04

建築メディアそしてアーカイブとしての「駿建」

TEXT=今村雅樹（いまむら・まさき）特任教授

1977年、私が学部から大学院へ進学した年です。建築家になりたくて長崎から東京へ出てきた後、当時の近江栄先生（建築論）から、「建築家になるには大学院まで行きなさい」と教えられ進学しましたが、振り返ってみると大正解でした。

大学院の頃、恩師の宮川英二先生（設計計画）から村野藤吾事務所を修行先として紹介されましたが、その頃の事務所は、生憎の火の車で仕事待ちの状況、その間、伊藤喜三郎先生の事務所を紹介され、JIAインターンとして参加したまま、院修了後もお世話になることになりました。

学生の頃から、学内よりも学外の建築学生や建築家達と活動するのが好きで、大学を出てからも同期の建築家仲間が多く、その後ほとんどが大学教授となり、インターユニバーシティでのワークショップやコンペ審査会、学会・JIA委員会などでも、日大と他大をつなぐ役割を果たせたように思います。

そんな中、大学院時代に学内院生たちでまとめた雑誌「都市住宅」の「歩行者空間の生成（アーバンデザイン）」（写真1）は、貴重な成果でした。都市計画の博士課程に所属していた数先輩の三浦周治氏がリーダーとなり、

学問領域を超えて、修士の院生たちで調査分析から編集までまとめあげた経験は、今も総合力の原点になっています。……そうか、近江先生に言われた「建築家になるには大学院まで行きなさい」というのは、こういう「時間と空間」の使い方を勉強しなさいということだったのか……と理解しました。

建築家を目指すのであれば、学生時代はとにかく、「領域を超えて研究・活動すること」が重要で、私も学部では構造デザイン研究会に所属、同期の岡田章先生らとともに齋藤公男先生の指導を受け、大学院では先述の都市計画領域の話題に首を突っ込み、歴史研の韓国建築研修にも参加し、劇場計画の本杉省三先生と多彩な演劇空間を楽しみ建築論に花を咲かせました。

もちろん、恩師の宮川先生から、「水曜会」という喫茶店ゼミで、スカルバ、アルビーニ、村野藤吾、前川國男などの建築分析をした由で、村野事務所を紹介していただいたように、時代は変わっても、皆さんに建築に対する貪欲さがあれば、必ず道は開けるに違いないでしょう。

「駿建」と私とは、大学院を出てから10年目の「大阪平和資料館」コンペ入賞（1989年7



私と建築「マチスのように」（2019年1月号）。

月号）にて初掲載後、非常勤講師の頃、「太田市休泊総合地域センター（ふれあいセンター）」

コンペ最優秀賞（1997年1月号：表紙）の記事。その後は（毎号のように掲載された、研究室所属学生達のコンペ入賞や研究室活動の報告記事は別として）、母校の助教授として今村着任の挨拶「次世紀の都市づくりに向かって」（2000年7月号）からはじまり、くまもとアートポリス「西合志町保健福祉センター」（2002年7月号：表紙）（写真2）、所沢優々の森保育園プール「puca puca」（2005年7月号：表紙）、「韓国釜山国際コンペ」入賞（2006年1月号：表紙）、「再生5号館」竣工と宮川英二について（2008年7月号）、建築の現場の仕事「熊本県医師会館」（2017年10月号）、ARCHITECTURE & ME：マチスのように（2019年1月号）（写真3）、駿河台キャンパスについて「タワー・スコラ」（2019年4月号：表紙）、日本建築学会賞・教育賞受賞記念インタビュー（2019年10月号）など、教員としてだけでなく、「建築家として」掲載していただいたことに感謝しています。

これからの時代、「建築家」としての職能や仕事内容などは、大きく変化していくことでしょう。どのような社会にあっても、良き建築や都市空間のあり方を追い続ける、「建築家」の卵である学生諸君への良き道標となる、新しい建築メディア「駿建」となることを願っています。



雑誌「都市住宅」1978年7月号の表紙。



「西合志町保健福祉センター」が表紙となった「駿建」2002年7月号。

特集 | 本年度の新任教員・非常勤講師の紹介

新任教員

—
一瀬賢一（いちせ・けんいち） 特任教授

1982年名古屋工業大学大学院工学研究科建築学専攻修了。1982年大林組入社。現場経験後技術研究所に配属。2014年日本建築学会賞（技術）受賞。

今年度から特任教授として大学院、学部、短大の授業を担当することになりました一瀬です。私は、建設会社の技術研究所に所属し、「高性能・高機能化」、「品質・施工性向上」、「環境配慮」をキーワードとして、現場で使えるコンクリート材料の研究・開発および現場適用を中心に取り組んできました。学生の皆さんには、授業を通じて、各種建築物の魅力、ものづくりの楽しさと面白さを感じ取ってもらい、更に知識の習得だけでなく、知恵を絞ることの大切さについて、伝えていきたいと考えています。



理工学部

- ・ 建築材料特論 II
- ・ 建築実験 II

非常勤講師

—
石塚隆之（いしづか・たかゆき）

2004年日本大学理工学部建築学科卒業。2006年慶應義塾大学大学院修士課程修了。近藤哲雄建築設計事務所、高橋堅建築設計事務所を経て、2012年より大和ハウス工業企画開発設計部課長。

建築で必要なことは「聞く力」と「伝える力」です。クライアントが何を要求し、関わる人たちが何を最優先に実現するべきか。年齢や属性、立場の異なる人と丁寧に対話を重ねなければ、必ず認識の相違があります。どれだけ計画したものが素晴らしいものだとしても、相手に伝わらなければ意味がないのです。建築における「可視化」は、そうした認識の相違を埋める、強力なコミュニケーションツールとなるはず。SNSに触れ、発信することに慣れている皆さまから、どんな化学変化が生まれるのか。コロナ時代だからこそ、とても楽しみにしています。



理工学部

- ・ 建築情報処理 II

—
江泉光哲（えいずみ・みつあき）

2004年日本大学理工学部建築学科卒業。2006年日本大学大学院博士前期課程修了。2006-11年メジロスタジオ。2011年4FA設立。

大学を卒業して15年が経ち、改めて思うのは、「建築学科での学びはどの分野に進んでもとても役立つ」ということです。とりわけ設計の授業は、自問自答しながら社会と向き合い、建築というアウトプットを自己表現し、プロフェッショナルな先生方の前で発表をする。そのために色々なものに興味を持ち、考察をすることの訓練が役立つことは、僕だけでなく、他分野へ活躍の場を移した同期の友人も同じようなことを言っていました。コロナ禍で制約は多いですが、その先の未来の大きな経験値を得るために、今を全力で楽しんでください。



三重の住宅
photo=土面彰史

理工学部

- ・ デザイン基礎 I
- ・ デザイン基礎 II

—
勝矢武之（かつや・たけゆき）

2000年京都大学工学部建築学科修士課程修了。同年より株式会社日建設計。現在、設計部門および新領域部門 NIKKEN ACTIVITY DESIGN lab ダイレクター。

建築とは、世界と関わり、新しい世界を構想する行為です。そのためには、世界のさまざまな豊かさを知り、変化するものや多様なものを見なやかに捉え、普遍的に変わらないものを見失わず、創造の意思を持って設計をやりぬくことが大切です。建築の仕事を通じて、世界の多くの街を訪れ、多様な建築の豊かさに触れてきました。それゆえグローバルに考え、ローカルにデザインすることを大切にしています。講座を通じて、皆さんに世界の建築の多様な試みを伝えつつ、新たな世界を構想する面白さを共有していければと思います。一緒に頑張りましょう。



Camp Nou Barcelona

大学院

- ・ 建築デザイン I

—
小林達夫（こばやし・たつお）

1988年日本大学理工学部建築学科卒業。同年大成建設株式会社入社。現在、同社東京支店建築部技術部技術室、品質保証・BX・OJTチームチームリーダー。

歴史・文化・科学・スポーツ・芸能・芸術……、なんでもいいです。色々なものについて、今のうちから見て・聞いて・感じて・体験して、感動したり疑問に思ったりしてください。そして、ときどきその思考の中に、ちょっとだけ建築のことを考えに入れてみてください。さまざまな物事の中には、建築のヒントが隠されています。車や電車の扉から雨が入らないのはなぜ？ お寺の大屋根はどうやって支えられている？ などなど。それらの積み重ねは、皆さんが将来携わるさまざまな物事に必ず役に立つでしょう。



東京大学駒場キャンパス研究実験棟

理工学部

- ・ 建築積算・生産管理

短大

小日向 敬 (こひなた・たかし)

1993年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修了し、日建設計入社。設計部門、プロジェクト開発部門を経て、現在、エンジニアリング部門兼グローバルデザイン部門シニアダイレクター。

希望に満ち溢れているみなさん、課題など今に追われているみなさん、不安に直面している方もいる？ そんなみなさんに質問。あなたの目指すものは何？ 将来どんなことをしたいですか？ みなさんはこれからどんなキャリアを積んでいくことになります。ぜひ、そのキャリアをデザインし実行してください。ご家族や友人・仲間、大学・短大や教職員はそれを見守り、サポートし、時に軌道修正してくれるでしょうが、根本で支えるのは豊かな学びと経験に培われた想像力です。限りある時間を大切に創造する力を養ってください。

- ・建築デザインスタジオII
- ・建築デザインスタジオIII



NEC玉川ルネッサンスシティー
photo = 門馬金昭

理工学部

齋藤由和 (さいとう・ゆわ)

1997年日本大学生産工学部建築工学科卒業。1997-99年西沢大良建築設計事務所。2000年齋藤由和事務所設立、不動産会社兼務。2003年アデザイン設立。

私は、センスみたいなことをほとんど信じていません。設計の授業は、クリエイティブに生き抜いていく力を身につけていく授業だと思っています。毎回のエスキース、毎回の課題毎に力をつけてほしいです。それはたくさん見て目を養うこと。そしてたくさん描き、つくりながら手を練ること。そして、認識の幅を広げ、リテラシーを高めること。はじめから備わっている人はいません。自分の中の何かを信じないことで、どんどん吸収できます。しかしながら、先入観を外すのは結構大変です。たくさん議論しましょう。自分を超越するための授業になればと思っています。

- ・建築設計I
- ・建築設計II



草加の建物

理工学部

佐屋香織 (さや・かおり)

2008年日本女子大学大学院家政学研究科住居学専攻修了。2008-11年山本理顕設計工場勤務。2015年-ピークスタジオ一級建築士事務所設立共同代表。

建築は「対話」が重要です。私は、個人が有する能力や性質だけによる設計ではなく、個を超越して現れる集約的や共同的な創造的あり方を目指しています。大学で建築を学ぶ時間というものは、多くの経験や知識を吸収できるとも尊い時間です。そして、先生や先輩、友達などとたくさんの対話ができます。人の話を聞いて、自分の意見を伝える、この一見当たり前とも思えるやりとりは、建築を設計する上でとても大切です。建築家一人ではつくることのできない建築を、私も皆さんと対話を重ねながら、設計課題に取り組みたいと思っています。よろしくお願います。

- ・デザイン基礎II
- ・建築設計I
- ・デザインワークショップ



ダイロクパーク
Photo=NaoTakahashi

理工学部

下川太郎 (しもかわ・たろう)

2001年芝浦工業大学工学部建築工学科卒業。2002年パリ・ベルヴィル建築大学DPLG課程。2003-07年 Ateliers Lion Architectes Urbanistes。2009-15年藤木隆男建築研究所。2015年あまね設計設立。

モノの考え方、捉え方を広げてくれる学問が建築だと思っています。設計においては、取り巻く社会を理解し、違う意見を認め、多種多様な生活を想像することが必要だからです。つまり、建築を学ぶことで、想像力を鍛え、物事を多角的に見る眼が養われるのです。このような眼が身につくと、日常を今よりも少しだけ楽しく生きることができるかもしれません。学生時代の自由な時間は貴重です。興味を抱いたことにどんどん挑戦し、色々なことに触れ、刺激を受け、自己表現の引き出しを増やしてください。どんなことでも将来役に立つときが必ず来ますよ。

- ・デザイン基礎I
- ・建築設計II



レシボルト

理工学部

須藤 剛 (すどう・つよし)

2003年法政大学工学部土木工学科卒業。北川原温建築都市研究所、ジャムズなどを経て、2012年須藤剛建築設計事務所設立。

建築の設計は未来をつくることです。私たちの身の周りの環境は、年々状況が変化し、それに伴い、生活の様式や考え方も変化しています。変化の中で大切なものを見極め、変わっていくべきものと変えないものを考え、カタチにすること、することができることが建築を設計する愉しさであると思っています。たくさん建築を見て、議論して、建築をつくるよろこびを感じてほしいです。その出発点として、皆さんの設計課題に立ち合えることを楽しみにしています。

- ・建築設計I
- ・建築設計II



狛江の住宅
Photo=新建築社写真部

理工学部

高池葉子 (たかいけ・ようこ)

2008年慶應義塾大学大学院修了。2008-15年伊東豊雄建築設計事務所。2015年高池葉子建築設計事務所設立。

コロナ禍で対面とオンラインの併用授業は、負担が大きかったですね。対面授業では、悩みながら真摯に設計と取り組んでいる様子が見られました。今、心配なのは、周りの同級生や先輩に相談をすることが難しいということです。一人で家にこもっていても、設計はなかなか進歩しません。オンライン授業の際に、他の人の案に意見を言う取り組みをしたところ、同級生からいいアドバイスを聞き、案が発展した人がいました。感染対策に気をつけながら、他者の視点を設計に取り入れる工夫をしてください。

- ・建築設計I
- ・建築設計II



床と光の家
photo=中村絵

特集 | 本年度の新任教員・非常勤講師の紹介

理工学部

高橋 堅 (たかはし・けん)

- ・建築設計II
- ・建築設計IV

1993年東京理科大学理工学部建築学科卒業。1995年同大学大学院修士課程修了。1996年コロンビア大学大学院修士課程修了。1997-2000年青木淳建築計画事務所。2000年高橋堅建築設計事務所設立。

「建築とは何か?」かつて、こう問われたル・コルビュジエは、「考えに値することに、かたちを与えることだ」と即答しました。この言葉を胸に、今も私も考え続けています。考え抜かれた建築には、不思議とそれが顕れるものなのです。どの分野に進もうとも、学生の間に費やした熱量が、その先の世界を大きく押し広げるのだと思います。皆さんも大いに悩みながら、そして楽しみながら、建築や空間について考えてみてください。一緒に頑張りましょう!




姫宮の住宅

理工学部

田中 亮平 (たなか・りょうへい)

- ・デザイン基礎I
- ・デザイン基礎II

2004年名古屋市立大学芸術工学部卒業。2006年東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。2006-13年隈研吾建築都市設計事務所勤務。2013年G ARCHITECTS STUDIO設立。

自分の中から絞り出した答えを、「空間」として形にして人に伝え、共感を呼ぶまで社会や他人と向き合う。皆さんのそんな未来のお手伝いをさせていただくことになりました。私が担当するのは、デザイン基礎I・II。私のデザインの原体験も、同じく設計の基礎を学ぶ授業でした。基礎とはいえ、課題提出のため時間が許す限り、デザイン・設計に没頭しました。同じキャンパスで設計に打ち込む友人達と日々戯れ、しのぎを削り合う。それは、代え難い貴重な時間でした。皆さんが振り返った際にそう思えるよう、サポートしていきたいと思っています。




葉っぱの涼屋
photo=Junten Morita

理工学部

浜田 晶則 (はまだ・あきのり)

- ・デザイン基礎I
- ・デザイン基礎II

2010年首都大学東京(東京都立大学)卒業。2012年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。2014年AHA 浜田晶則建築設計事務所設立。同年よりteamLab Architects/パートナー。

設計は、考えることと伝えること、この2つの目的を達成するための手法ともいえるでしょう。考えるために手を動かし、コンピュータで計算をし、伝えるために美しくわかりやすく図面をつくる。よりよく考え、よりよく伝えるために設計やドローイングを学ぶのです。その目的を忘れずに授業に取り組んでみてください。一人で考えるだけでなく、友人と話し、それがうまくいっているかを確かめることで相対化していきます。建築は大変ですが、とても楽しいものづくりの分野です。いい仲間とともに、建築を楽しんで学んでいきましょう。




綾瀬の基板工場
photo = Kenta Hasegawa

理工学部

三好 礼益 (みよし・ひろやす)

- ・デザイン基礎I
- ・デザイン基礎II

2006年日本大学理工学部建築学科卒業。2008年日本大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。2008年日本設計。現在、同社建築設計群主管。

建築設計はチームワークです。建築・構造・設備・電気・ランドスケープ・照明など、専門分野は多岐に渡ります。私は普段、超高層建築の再開発事業を中心とした建築設計をしており、各々のプロフェッショナルの設計・思想を統括し、ひとつの建築を創出します。学生諸君には、夢中になれる専門分野に巡り合えることを願っています。学生時代の設計や思考・発見が、やがて信念となり、信じ続けることで、やがて夢が実現するときがきます。皆さんそれぞれに夢中になれることが見つかるよう、サポートできれば光栄です。と一緒に建築の楽しみを発見しましょう。




赤坂インターシティAIR

大学院

山我 信秀 (やまが・のぶひで)

- ・建築構造設計演習

1998年日本大学理工学部建築学科卒業(斎藤公男研究室)。1998年NTTファミリアーズ入社。現在、同都市・建築設計部構造設計部門課長。

斎藤公男先生の膜構造の実験を見学していた際に、力と形が密接に関係している膜構造に興味を持ち、構造設計の道に進みました。実務では、膜構造を設計する機会はまだありませんが、建築(形)と構造(力)を融合させた建築ができるよう取り組んでいます。授業では、建物の設計プロセスから、構造設計で重要な勘どころを学んでいただき、将来の実務に役立たせてほしいと思っています。また、計算するだけでなく、建物の根幹を成す骨組みをデザインするということを感じてもらいたいです。




ミツカンミュージアム

大学院

横山 陽平 (よこやま・ようへい)

- ・建築構造設計演習

1995年日本大学理工学部建築学科卒業。同年鹿島建設入社。現在、同東京建築支店建築工事管理部所属。

入社時に先輩現場所長から、「施工管理という仕事は、建物のつくり方を考え・実行することだ」と教えられ、以来26年間、担当した建物のつくり方を、創造・計画し、実行してきました。「建築構法」とはまさしく、建物のつくり方を教える授業だと認識しています。学生さんたちには、①わかりやすさ、②論理的さ、③泥臭さをモットーに、「技術屋としてのものづくり」を感じていただき、将来に繋げてほしいと思います。個人的にも、絶えず前向きに改善することを忘れず頑張ります!




虎屋赤坂店の夜間に行われた屋根ユニット鉄骨建方

▼スーパージュリー開催

2021年9月25日（土）にスーパージュリーが開催された。審査員は石川初氏（ランドスケープデザイナー／慶應義塾大学教授）、西田司氏（建築家／オンデザイン代表／東京理科大学准教授）、秋吉浩気氏（建築家／メタアーキテクト／VUILD 株式会社代表取締役CEO）がつとめた。審査員3名のミニレクチャーの後、学生の発表・講評が行われた。最優秀賞は建築学科2年の高松えみりさん「やなかこども基地」、優秀賞は学部3年の江原悠介さん「代官山アーバンエレメント」が受賞した。また、石川初賞は建築学科4年の榎本海月さん・藤井朋美さん・山下紗輝衣さん「御茶ノ水の隠れた物語」、西田司賞は建築学科2年の妹尾美希さん「renovation²一人が通る道から始まるリノベーション住宅」、秋吉浩気賞は建築学科2年の矢島琴乃さん「羽根木食堂—子ども食堂と地域の繋がリー」が受賞した。



最優秀賞「やなかこども基地」(高松えみり・2年)



審査の様子。(photo = 富井雄太郎)



▼日本造園学会 2021 年度全国大会学生公開デザインコンペティションにおいて、建築学専攻2年の須貝仁さんが入賞

「日本造園学会 2021 年度全国大会学生公開デザインコンペティション」（主催：公益社団法人日本造園学会）において、建築学専攻2年の須貝仁さん（田所研）と東京藝術大学大学院生による作品「遺構を縫う～窓を介した記憶と風景の日常～」が、最優秀賞1点、優秀賞2点に次ぐ9点の入賞作品のうち1点に選ばれた。

▼ぐっとずっと。エネルギー住宅作品コンテスト2020において、建築学専攻2年の石田弘樹さん、一柳亮太郎さん、岩崎正人さんが佳作を受賞

「ぐっとずっと。エネルギー住宅作品コンテスト2020」（主催：中国電力株式会社）において、建築学専攻2年の石田弘樹さん、一柳亮太郎さん、岩崎正人さん（古澤研）の作品「volume//void（ヴォリューム ヴォイド）～位置指定道路を介して繋がる住宅群～」が、最優秀賞1点、審査員特別賞2点、優秀賞1点に次ぐ佳作に選ばれた。



造園学会コンペ「遺構を縫う～窓を介した記憶と風景の日常～」(須貝仁・M2ほか)

▼第52回毎日・DAS学生デザイン賞（金の卵賞）において建築学専攻1年の相川文成さんが入選

「第52回毎日・DAS学生デザイン賞（金の卵賞）」（主催：一般社団法人総合デザイナー協会）において、建築学専攻1年の相川文成さん（今村研）の作品「Takadanobaba Public Station」が、入賞3点に次ぐ入選20点のうち1点に選ばれた。

▼建築文化週間 学生グランプリ2021において建築学専攻1年の相川文成さん、稲村浩成さん、佐々木拓海さんが入選

「建築文化週間 学生グランプリ2021 銀茶会の茶席」（主催／日本建築学会）にて、建築学専攻1年の相川文成さん（今村研）、稲村浩成さん（古澤研）、佐々木拓海さん（佐藤光彦研）が、「入選」および「本阿彌守光賞（審査員賞）」を受賞した。テーマは「ひと会」であり、公開審査会を経て最優秀賞1点、優秀賞1点に次ぐ、入選に選ばれた。

▼日本音響学会 騒音・振動研究会において建築学専攻2年の青木怜依奈さんが学生優秀発表賞を受賞

「日本音響学会 騒音・振動研究会」において、建築学専攻2年の青木怜依奈さん（富田研）が学生優秀発表賞に選ばれた。

▼レモン画翠1Fショーケースにて建築設計VIの作品を展示

レモン画翠1Fショーケースにて、建築学科4年の古秋林さん、武井翔太郎さん（佐藤光彦研）、伊藤菜々子、久米夏子さん、先崎亜美さん、新倉未友さん、藤井朋美さん（山中研）、有賀未貴さん、榎本海月さん（今村研）、山下紗輝衣さん（佐藤慎也研）、元木颯香さん（二瓶研）、森本あんなさん（泉山研）が建築設計VIの作品展示を行った（2021年10月～11月）。

▼建築学科の泉山聖威助教が2021年度グッドデザイン賞を受賞

「グッドデザイン賞2021」（日本デザイン振興会）において、建築学科の泉山聖威助教が代表を務める一般社団法人ソトノバと、プレイスメイキング・ジャパン、独立行政法人都市再生機構による「公共空間の変革に向けた普及啓発[プレイスメイキングのムーブメント化：「プレイスゲーム」と「プレイスメイキングウィーク」]」が、グッドデザイン賞2021を受賞した。また、同じく泉山聖威助教が代表を務める一般社団法人ソトノバと、Park(ing)Day Japanによる「路上駐車スペース活用の普及啓発活動[Park(ing)Day Japan]」が、グッドデザイン賞2021を受賞した。

▼八戸市美術館の館長に佐藤慎也教授が就任

2021年11月に開館した八戸市美術館の館長に、2021年4月1日付で佐藤慎也教授が就任した。



DAS学生デザイン賞入選「Takadanobaba Public Station」(相川文成・M1)



レモン画翠1Fショーケースに展示された模型



銀茶会の茶席の受賞作品



「八戸市美術館」内観 photo = Daici Ano

MESSAGE FROM OB/OG

VOL.14

下村耀子（しもむら・ようこ）

まとめあげ、目指す内装をつくる

内装の設計・施工、特注家具の製作、既製品の納品を請け負う会社で、営業の仕事をしています。お客さまは、企業、ゼネコン、デベロッパーなど多岐にわたり、ラグジュアリーホテルやハイブランドの店舗、オフィスの役員エリアなど、上質な空間の仕事を受注することが多いです。

営業担当の仕事は、お客さまの窓口となり、新規の依頼やメンテナンスなど相談内容を聞き、社内のさまざまな部署と連携しながら、案件の最初から最後までをまとめあげていく役割を担っています。依頼内容にそって見積を作成し、契約成立後は、工事や家具製作の手配を進めていきます。設計担当が描いた施工図をお客さまとの打合せで説明したり、家具工場に出向き、検査をすることもあります。新規案件ですと、依頼をいただいてから引渡しまで、およそ1年かかります。

学部生の頃は、そのまま佐藤慎也研究室に所属して、もっとアートプロジェクトに関わりたいたいと思い、大学院への進学を決めました。現在の職種を決めたのは、M1の半ば頃だったと思います。研究室でアートプロジェクトの会場構成をしていて、空間の中で利用者がどのように過ごすかに興味があったので、人に近い内装・家具に関わるのできる仕事に就きたいと思っていました。

配属されて2年間は、特注家具の大型案件を担当しました。営業は



修了年：2018年大学院前期課程修了

研究室：佐藤慎也研究室

修士論文：美術館の改修計画に関する研究

所属会社：三越伊勢丹プロパティ・デザイン
部署名・役職：環境創造事業部 建築統括部 第一グループ 営業担当

案件を動かしていく立場なので、プロジェクトチームにベテランの方々がいなくても、仕事の指示をしていかなければなりません。最初は新人ということもあり、他人頼みになってしまっていたのですが、お客さまの意図に沿わない成果物があがってしまうなど、意思疎通が図れず、失敗が続きました。その経験から、できる作業は自分で行うこと、チーム内でお客さまからの要望をしっかりと共有すること、目的を明確にして作業ができるようメンバーをまとめあげていく存在であること、を意識して仕事に取り組むように努力しました。

研究室では、アートプロジェクトに関わるが多かったので、他分野の方々とお話する機会が多かったです。分野が違えば、それぞれが使う言葉も異なり、また物事へのアプローチのしかたも異なってきます。相手がどのような思考でいるのかをお互いに対話し、確認しながらプロジェクトをつくりあげていった経験が、今の仕事をしていく上での会話力にもつながっていったと思います。

就職活動では、「自分がこれまで何をしてきたか」ということももちろん重要ですが、「その会社で自分はどんな仕事をしたいのか」という明確なビジョンを持つことが大切だと感じます。また、学校での勉強だけでなく、旅行や施設見学、美術鑑賞など、知見を広げる機会をたくさんつくり、自分なりの視点を持って感性を高めていけたら良いと思います。 ■



左上：2019年開業The Okura Tokyo オークラ プレステージタワー客室：ゼネコン下で内装の木工事、施主下で特注家具を受注。

左下：2019年開業The Okura Tokyo クラブスイート客室。

右上：家具工場での検査の写真。実寸図で形状を確認中。

右下：中国の大理石工場で、テーブル天板の型に合わせて、柄を取る位置を確認中。

紙媒体としての「駿建」終刊によせて

新しいメディア構築の展開に期待を

TEXT = 古澤大輔 准教授

これまで「駿建」の編集長を長く務められた佐藤慎也先生に代わって、今回の号より私が編集長を務めさせていただくことになりました。そんな今回の2022年1月号ですが、特集のタイトルが示すように、「駿建」は本号を持って紙媒体での発行を廃止し、「新しい別のかたち」で再出発することになりました。この経緯については特集の座談会をお読みいただければ幸いです。とても長い歴史を持つ本誌を、今後どのようにしていくのかについて、これまで継続して駿建編集委員会の中で議論してきたのですが、たまたま私の編集長着任のタイミングと紙媒体廃止の決定が重なりました。

思い返せば、私は2013年に本学の助教として着任し、その年の7月号から駿建編集委員を担当させていただきました。「駿建」がA4判カラーという現在の姿にリニューアルされたちょうど1年後のことです。当時の私はこれほどまで内容が充実した学内誌を見たことがなく、とても驚いたことを覚えています。多彩な企画内容が編集委員の先生方の熱意によって支えられていることを知りました。それ以降、私も編集委員としていろいろな企画に携わらせていただき、誌面のさらなる充実を目指してきました。学会賞受賞者への記念インタビューや学生たちとの座談会企画など、誌面をつくることを通じて、さまざまな方たちと交流できるのが楽しみのひとつでした。

しかし、おそらく5年ほど前からだと思いますが、本誌を読んでもくれる学生がとても少なくなったのを実感するようになりました。せっかく配布してもそのままごみ箱に捨ててしまう学生も見かけるようになり、読んでもくれる学生がほとんどいないといっても過言ではない状況になったのです。よく「若者の〇〇離れ」という表現がありますが、まさに学生の「駿建離れ」というような状況です。しかしこの表現は、若者が〇〇から離れたのではなく、逆に〇〇が若者から離れていったとも捉えることができます。つまり、「駿建」が学生から離れていったのかも知れません。その原因のひとつには、紙の誌面という固定化された遅いメディアの限界があるように思われます。特集の座談会でも触れられていますが、SNSの急速な普及やスマホの大画面化など、移り行く時代の流れとのズレが顕在化したのです。そして、この状況を修正するために『「駿建」のウェブ

化」が編集委員会で決定されました。

しかし、ウェブ化するにあたって、どのようなコンテンツを用意するかなど、その詳細はまだ決まっていません。単に駿建という名のホームページを作成し、紙媒体で展開した記事をデジタルデータで提供すれば問題が解決するような単純な話ではないはず。建築学科としてどのような情報を、どのような形で学内・学外に発信し、そして、その情報をどのようにアーカイブしていくのかは、学科全体の広報戦略と密接に関係します。「駿建」という媒体の枠を超えて、日大理工の建築学科として、学生と教員、学科と社会、あるいは学生同士を互いに結びつけるメディア構築の方法を議論していかなければなりません。今号で紙媒体は廃止になりますが、近い将来に何かしらの形で議論の結果をお見せできればと思います。次なる展開にご期待いただければ幸いです。

メディアの形もまた「一期一会」

TEXT = 佐藤慎也 教授

この文章を読んでいるあなたは誰でしょうか？ 2022年の今、この大学に在学する現在の学生でしょうか？ それとも、50年後の2072年に、この大学のアーカイブを調べている未来の教員や卒業生でしょうか？ これまで、目の前にいる学生だけに向けて、「駿建」の編集を続けてきました。しかし、届けるべき読者が見えなくなったところで、物質としての「駿建」を終えることにしたいと思います。最後に何を書こうか迷いましたが、僕自身が大学に着任した25年前に、「駿建」1996年7月号に書いた文章を再録します。「一期一会」と題した文章ですが、これまで「駿建」を編集してきた気分をあらわしているように思うからです。

ビデオ・アートの第一人者であるナム・ジュン・パイク（白南準）の座右の銘は、「一期一会」という言葉であるそうだ。広辞苑によると、「一期一会」とは、《茶会の心得から》生涯にただ一度まみえること。一生に一度限りであること。《ということになる。

私が2年前、日本大学大学院の修士設計として発表したプロジェクトのテーマは、「同時代芸術のための建築空間」というものだった。

Contents

02 [SPECIAL FEATURE1]

さよなら「駿建」

04 スペシャル座談会 - 次の時代の「駿建」のカタチ

12 寄稿文：私と「駿建」

1. 「連子」から「駿建」へーふたつの思い出 | 斎藤公男名誉教授
2. 目が離せない「駿建」に！ | 蜂巣浩生教授
3. バックナンバーを見直して | 宇於崎勝也教授
4. 建築メディアそしてアーカイブとしての「駿建」 | 今村雅樹特任教授

16 [SPECIAL FEATURE2]

2021 度の新任教員・非常勤講師の紹介

19 [NEWS & TOPICS]

- ・スーパージュリー開催
- ・日本造園学会 2021 年度全国大会学生公開デザインコンペティションにおいて、建築学専攻 2 年の須仁仁さんが入賞ほか

21 [Message from OB/OG]

- vol.14 まとめあげ、目指す内装をつくる
下村耀子(三越伊勢丹プロパティ・デザイン /2018 年修了)

22 [SPECIAL FEATURE3]

- 紙媒体としての「駿建」終刊によせて
・新しいメディア構築の展開に期待を | 古澤大輔 准教授
・メディアの形もまた「一期一会」 | 佐藤慎也 教授

24 [Visit & Criticism]

- 学生建築探訪 vol.17 「中銀カプセルタワーをつくろう！」
小川円香、山田大貴 (B4・古澤研究室)

先のパイクの作品をはじめとする 20 世紀後半のアートは、作品の中に限定された時間と空間を含み込む傾向にあり、アーティストが表現するのと同じ時間と空間を身体的に体験することだけが、アートを感じ取ることを可能にしている。そういった状況から、そのテーマは、それ以前のアートに対応する美術館や劇場と呼ばれるものとは異なる、新しい建築を作り出すことを目的としていた。(もちろん、それとは逆の方向として、作品のデジタル化とともに、インターネットの中のミュージアムといった、時間と空間の選択を可能とするものも現れている。)例えば、インスタレーションと呼ばれる、空間そのものを作品として扱うものがある。ギャラリーや美術館に作品が設置され、一定の期間が過ぎると解体される。それは、今までの絵画や彫刻のように額縁の中や台座の上で完結しており、どこにでも移動可能なものとは異なる。例えば、パフォーマンスと呼ばれる、アーティストの身体表現を作品として扱うものがある。それもまた限られた時間の中で行われるものであり、形ある作品として残るものではない。それらは、写真やビデオ、フィルム、文章によって残されるが、作品そのものを体験する機会は失われる。つまり、現代においては、アートの体験もまた「一期一会」である。

同時代の精神活動の所産であるコンテンポラリー・アート(同時代芸術)を体験し、思考することは、同時代の感覚を感じ取り、理解することにつながる。しかし、歴史に登場する過去のアートもまた、その時代における同時代の表現であったことも忘れてはならない。それらもまた、その時代の思想や技術によってのみ作り出されるものである。私達は歴史を知ることによって、アーティストがどのような時代に生き、どのように表現を行ったのかを知り、自分の同時代を考えるための先例とする。これらのアートの話は、建築についても同じである。

建築を理解する上でも体験は重要である。私は建築を学び始め、そのいくつかを実際に見に行くようになり、今まで知らなかった場所を訪れるようになった。そしてまた、それは建築を体験することだけではなく、街を体験することでもあった。場所によっては、再訪することができないかもしれない。そこを訪れる時間や天候、季節によって、または自分自身の体調によってさえも、その体験は異なるだろう。そういう意味で、建築の体験もまた「一期一会」である。(「駿建」1996年7月号より) 駿

SHUNKEN

2022 Jan. Vol.49 No.2

「駿建」

発行日：2022年1月11日

発行人：古澤大輔

編集委員：佐藤慎也、山崎誠子、泉山星威、井口雅登、
井本佐保里、宮田教典、堀切梨奈子、道明裕毅

編集・アートディレクション：大西正紀+田中元子/mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

Visit & Criticism

学生建築探訪 vol.17

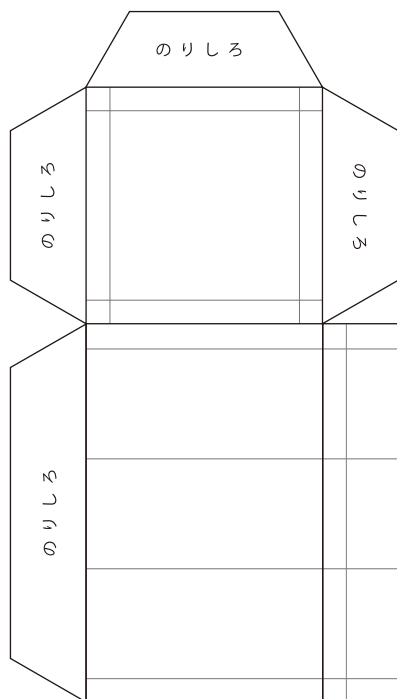
中銀カプセルタワーをつくらう！

TEXT=小川円香、山田大貴 (B4・古澤研究室)

日本大学の学内誌として発行され続けてきたこの「駿建」ですが、今号をもって紙媒体としての発行は最後になるそうです。そこで、実際に手に取ることのできる紙媒体というメディアだからこそできる企画を通して、紙媒体最後の「駿建」が、読者の方々の記憶に残るものにしてもらいたいとはじまったのが、今回の「中銀カプセルタワーをつくらう！」です。

学内誌という特性を活かし、大学内に設置された縮尺1/80の中銀カプセルタワーの模型に、読者がカプセルを自由に取り付けていくことで、学年の垣根を超えて、建築学科全体で模型の完成を目指します。

制作対象として中銀カプセルタワーを選んだのは、「駿建」同様、終わりを迎える建築として、長年多くの人に愛され続けてきた歴史があるからです。この企画に最もふさわしい建築物だと考えました。今回の企画を通じて、ひとりでも多くの読者の方に、“紙媒体としての「駿建」”が楽しい思い出になることを願っています。(山田)



解体される中銀カプセルタワー：中銀カプセルタワービルは、日本を代表するメタボリズム建築で、黒川紀章によって設計され、1972年に竣工されました。居住空間であるカプセルと、階段やEVが巡るコア・シャフトから成り立っており、前者は都市の中の個人を示すアイコンとなっています。(小川)

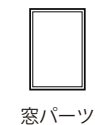
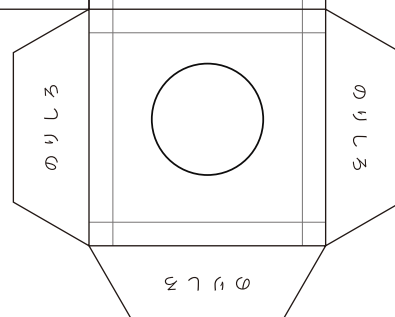
学内に設置されているコア模型：タワースコラ7階にて、設置予定です。ぜひ、このコア模型に、一人一人がカプセルを取り付けて、中銀カプセルタワーの完成をお手伝いしてください。現実の中銀カプセルタワーとは違い、取り付ける向きや方向は自由です。カプセルの取り付けについて、詳しくはコア模型横に掲示しています。



カプセルの組み立て方

1. 太い黒線で展開図の外周を切り出す。
2. 細い黒線で山折りをする。
3. 外観の装飾（着色や付属パーツの接着など）を行う。
4. のりしろに糊付けし、組み立てる。

完成したカプセル：実際のカプセルのサイズは(2,500×4,000×2,500mm)ですが、今回はS=1/80の大きさで再現しています。タワー・スコラ7階にて切り取り、組み立て、着色可能です。ぜひ、自分の好きなようにカプセルをデザインしてみてください。ドアパーツや窓パーツの接着位置はもちろん、着色も自由です。



窓パーツ



ドアパーツ

S=1/80

「駿建」では、在学生、教員、非常勤講師の皆さまからの、コンペやコンクール、学会、スポーツ大会、その他の受賞・表彰に関する情報提供を下記メールアドレスにて受け付けています。<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>